

線に沿って一直線につづいている。レニングラードで一番感心したのは公害のない空の美しさである。太陽のまわりの空までが白っぽく感じられないのである。天文台の中には職員の家族のための幼稚園から学校まで付属していて、ブルコヴォは一つの天文都市といえる。

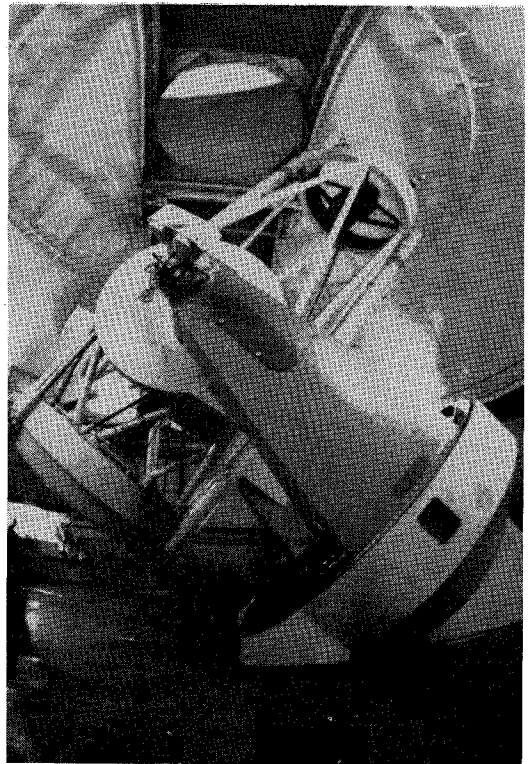
台長ミハイロフ博士と、長沢博士から紹介状をいただいていた太陽物理関係のグネヴィシエフ博士は御不在であった。ブルコヴォ天文台の話はここを訪れた日本の天文学者の数が多いため天文月報の中に、世界の天文台—ブルコヴォ天文台(中野三郎)、ソ連の天文台を見て(関口直甫)、モスクワ会議の印象(宮地政司)など多くの紹介が残されている。説明にあたられたのは子午線関係のポロジエンツェフ博士(D.D. Polozhentsev)で、どこか態度が故郷中教授と似通っていた。この天文台の創立は1838年のことで、ドイツ軍は一時は天文台の1 km 近くまで進撃し、クラーク製 76 cm の屈折望遠鏡もこの時破壊され、現在陳列室に戦火をまぬがれたクラーク製レンズと焼けただれた望遠鏡部品とがさがられていた。新天文台は1945年に再建され、陳列室の高い柱の間には創立者ストルヴェ博士以下、歴代の台長の肖像がかざられている。多くの陳列品の中では、ソ連の天文学者の撮された太陽コロナの写真とゴジレフ博士の月の異常現象として知られるアルフォンススのスペクトル写真が特に目についた。

本館を出るとあたり一面はロマシカの白い花が咲きみだれ、本館からやや離れた牧草地には牛が放し飼いになっており、その先に電波望遠鏡(長さ120 m)があった。これは数 mm から数 cm までの試験用アンテナとして使われているそうで近い将来に600 mのアンテナを計画中とのことである。

ちょうど土曜日のことで職員はあまり見当らず、すべてポロジエンツェフ博士の説明によるものである。光学関係としては子午環(関口直甫:天文月報1961年9月号参照)、三鷹にあるものと同じツァイス65センチ屈折



第6図 ブルコヴォ天文台の陳列室とポロジエンツェフ博士 (大谷豊和氏撮影)



第5図 クリミヤ天文台264センチ反射望遠鏡 (船田 工氏撮影)

望遠鏡(これにはマクスツフ・カメラと光電ガイドが取り付けられていた)およびシーロスタットによる黒点磁場の測定装置などがある。最後のスペクトログラフ室の大きさは長さ17 mもある大きなもので、光学系の焦点距離は8 mである。測定室にはイクサノフ博士(Ikhsanov)が観測中であり詳しい説明を聞くことができた。ブルコヴォ天文台で特に印象的だったことは天文台全体から受ける絵画的な美しさで、ガラス箱に保管されているストルヴェ博士の野帳一つにも、ソ連の天文台の古い伝統への誇りがまざまざと感じ取られた。

天文月報に投稿欄を設けることについて

編集係よりお知らせ

- ① 来る新年号より天文月報に投稿欄を設け、天文学の進歩および普及についての会員の方の建設的な御意見の発表討論の場として提供したいと思います。
- ② 原則として原稿の長さは400字詰原稿用紙3枚以内、毎号の天文月報の1頁以内をこれに充てます。
- ③ 投稿された原稿は、採否にかかわらずお返し致しません。